令和３年度研究成果報告書　　【継続：令和２～令和３年度指定】

都道府県・指定都市番号	36	都道府県・指定都市名	徳島県	研究課題番号・校種名	１　高等学校
				教科等名	地理歴史
研究課題	**学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究。** 歴史領域科目，地理領域科目について，社会的事象の「歴史的な見方・考え方」や，「地理的な見方・考え方」を働かせ，「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る授業実践の研究。				
学校名（生徒数）	とくしまけんりつわきまちこうとうがっこう 徳島県立脇町高等学校（523名）				
所在地(電話番号)	徳島県美馬市脇町大字脇町1270の２（0883-52-2208）				
研究内容等掲載 ウェブサイトURL	https://wakimachi-hs.tokushima-ec.ed.jp/				

研究のキーワード

「『問い』の構造化」，「科目相互の連携」，「指導と評価の一体化」，「単元構想」，「概念としての理解」

研究結果のポイント

・「問い」を重視し，「単元の基軸となる問い」を設定したうえで，生徒による課題（「問い」）の作成と研究，発表，まとめに至る学習プロセスの構成を通して，指導と評価の一体化を具体化する単元の開発過程を確立できた。
・単元のまとまりにおいて「学習改善につなげる評価」と「評定に用いる評価」の場面を設定し，Ｂ評価を軸とする評価規準とＢ評価に達しない生徒への手立てを作成し，指導と評価の一体化を実現することができた。
・地理歴史・公民科の全教員が地理と歴史の授業を共同で開発することを通して，各科目に対する理解が深まり，教員間の連携体制を整えることができた。
・社会的事象について「見方・考え方」を働かせて多面的・多角的に考察させることで，概念として理解を促し，獲得した概念を生かした現代社会の考察につながった。
・一人一台端末を活用し，コロナ禍での工夫した「主体的・対話的で深い学び」を実践できた。

１　研究主題等

（１）研究主題

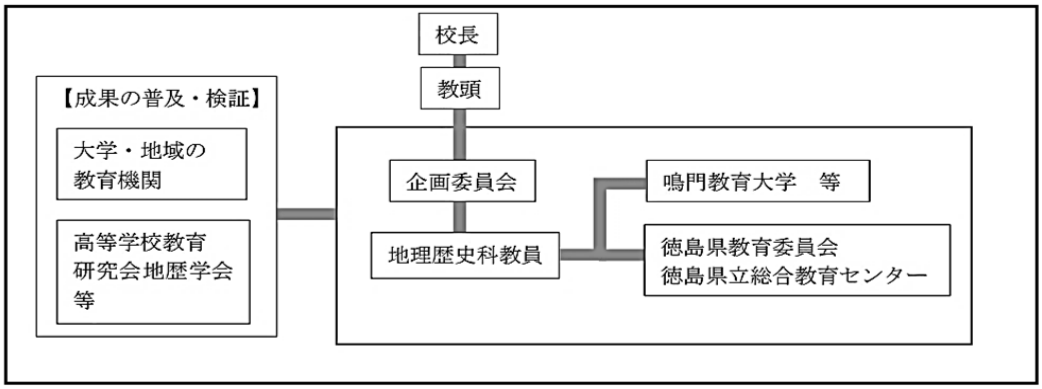
「地理総合」「歴史総合」を見据えた，地理歴史科の科目相互の連携を図りつつ「問い」を重視した授業改善と評価方法の研究

（２）研究主題設定の理由

本校の位置する徳島県西部では急速に過疎が進行し，本校も生徒数減少や交通不便等の問題を抱えている。こうした中で，社会の変化に対応し広く変化に富む世界で活躍する人材を育成するため，総合的な探究の時間やスーパーサイエンスハイスクールの課題研究等を通して，実験・観察，分析，発表等に取り組んできた。地理歴史科においても，他教科や地域との連携体制を整え，探究的な学びを実施してきた。しかしながら年度当初の生徒アンケートでは，地理的・歴史的視点から現代社会の課題を考察している回答は約５割にとどまり，培った資質・能力を実際に生かすまでには至っていない状況が明らかとなった。また，新課程が始まる次年度以降，地理歴史科のどの教員も「地理総合」「歴史総合」を指導する可能性があることから，単元や教材の開発において連携し，評価方法と評価規準について共通認識をもつ必要性が高まっている。

こうした課題意識に基づき，本研究では「問い」を重視することを中核に据えて授業改善に取り組み，「問い」の構造化による指導と評価の一体化を実現する単元開発を目指した。「問い」の設定においては，まず単元目標や評価規準を踏まえた「単元を貫く問い」を設定し，次に各時間の主体的な探究のための「問い」を設定すること，さらに「問い」について考察したことの表現活動を「学習改善につなげる評価」の場面として設定することに重きをおいた。また，次年度から導入される新科目の単元開発や評価規準の作成のうえで，地理歴史科の教員間の連携は不可欠なものとなる。本研究で取り組む単元開発のための教科会や教員の連携の在り方や効果についても，一つの事例を提示したい。以上の理由から本研究主題を設定した。

（３）研究体制



（４）２年間の主な取組

令和２年度	・前年度の取組を踏まえたグランドデザイン（単元構想・評価方法等を含む）作成 ・生徒・教員対象アンケート実施及び集計・分析（６月・12 月） ・相互授業参観週間での「地理総合」を見据えた地域との連携（ゲストティーチャーの招聘，フィールドワークの実践報告），及び「歴史総合」を見据えた科目・他教科等・外部機関等との連携を図った公開授業 ・「地理総合」「歴史総合」の校内研修会を実施 ・教育課程研究指定校事業研究会及び SSH 生徒研究発表会並びに徳島県高等学校教育研究会（地歴学会）地域別研修会（授業公開「世界史Ａ」及び研究協議　オンライン開催） ・文部科学省高等学校教育課程研究協議会（全国主事会）にて本校の取組の紹介 ・教育課程研究指定校事業研究協議会発表（オンライン開催）
令和３年度	・前年度の取組を踏まえたグランドデザイン（単元構想・評価方法等を含む）作成 ・生徒・教員対象アンケート実施及び集計・分析（４月・12 月） ・相互授業参観週間での「地理総合」「歴史総合」を見据えたデジタル資料・授業支援アプリを活用した公開授業，地歴公民科の全教員で共同開発した授業を遠隔ライブ配信 ・「地理総合」「歴史総合」の校内研修会を実施 ・地理歴史科全教員による３年生「世界史Ａ」考査問題及び評価規準の共同作成 ・教育課程研究指定校事業研究会及び SSH 生徒研究発表会並びに徳島県高等学校教育研究会（地歴学会）地域別研修会（授業公開「日本史Ａ」及び研究協議　オンライン開催） ・教育課程研究指定校事業研究協議会発表（オンライン開催） ・本年度及び４年間の研究結果のとりまとめ，次年度の取組に向けた協議（教科会・SSH プロジェクトチーム・徳島県教育委員会・鳴門教育大学）

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）研究内容

①「問い」の構造化による指導と評価の一体化を図る単元開発

・単元における「問い」の構成と「見方・考え方」を働かせることを促す「問い」の研究。

・評価場面の精選と適切な設定，指導と評価の一体化を図る単元の開発過程の確立。

・単元全体を通して生徒の思考の深まりを見取るために使用するワークシートの作成。

②地理歴史科の科目相互の連携を一層進めつつ，「深い学び」を促す授業研究

・社会的事象を時間軸と空間軸の双方で捉え，多面的・多角的に考察させる教材の研究。

・地理歴史科の全ての教員が「地理総合」「歴史総合」を担当することを想定し，各科目の単元構想や評価計画において共通認識をもつための教員連携について。

③徳島県ＧＩＧＡスクール構想によるこれからの教育の検討

・授業でＩＣＴ機器（一人一台端末）を積極的に活用し，デジタルアーカイブやＧＩＳを用いて社会的事象について調べまとめる技能の向上を図る授業の開発とその効果の検証。

（２）具体的な研究活動

①「問い」の構造化による指導と評価の一体化を図る単元開発

・単元目標に基づき「見方・考え方」を働かせる学習課題として「単元を貫く問い」をＭＱ（メインクエスチョン）とし，その探究の手立てとなる各時間の「問い」をＳＱ（サブクエステョン）として設定し，「問い」の構造化を図った。

・「学習改善につなげる評価」を行う場面としては，「問い」に対して生徒が考察したことを表現する場面を設定し，具体的な評価計画の事例として提示した。

・歴史学習の内容と身近なキーワードを掛け合わせた「問い」や，多様な地理情報システムを活用してグローカルという視座に立つ「問い」を設定するなどし，社会的事象に対する「見方・考え方」がよく働く「問い」を設定した。

・単元構想においては，単元全体をまとまりとして評価することを念頭におき，三つの観点別に「学習改善につなげる評価」と「評定に用いる評価」の場面を設定した。単元における評価対象と各観点の評価規準も具体的に示した。

・生徒が目的意識を持って授業に臨めるように，各時間のワークシートに本時のねらいや到達目標等を示した。単元を通して使用するワークシートでは，生徒自身が単元の始めとまとめの段階で思考の変容に気付く構成とし，学習の深化と学習意欲の伸長を図った。

②地理歴史科の科目相互の連携を一層進めつつ，「深い学び」を促す授業研究

・地歴公民科全教員の一層の連携を図る取組として「地理総合」「歴史総合」の授業を共同で作成しティームティーチングを試みた。３年生「世界史Ａ」の授業では授業者を地理の教員，各教室での補助を歴史の教員に割り当て，複数クラスにライブ配信する遠隔授業を実施した。

・教科会を重ね，観点別学習状況の評価計画と評価方法について共有し，その更なる充実と質の向上についての意見交換をし，繰り返しブラッシュアップを図った。

③徳島県ＧＩＧＡスクール構想によるこれからの教育の検討

・一人一台端末を用いてデジタルアーカイブやデジタルＧＩＳなどを積極的に活用し，資料を読み取る学習機会を設けるとともに，その効果を検証した。また授業支援アプリを活用することで，コロナ禍でも画面上でグループ協議をし，協働的な学びができる可能性を示した。

３　研究の成果と課題（○成果●課題）

○　「問い」の構造化による指導と評価の一体化を具体化する単元の開発過程を確立した。すなわち，①単元の目標や評価規準を踏まえて，②「見方・考え方」を働かせる学習上の課題「単元を貫く問い」（ＭＱ）を設定し，さらに，その課題を探究するために，③各時間の主題と「問い」（ＳＱ）を設定し，指導場面では，④各時間の「問い」について生徒が考察したことを表現する場面を「学習改善につなげる評価」を行う場面として設定した。こうした構造化した問いの設定①～④により，指導と評価の一体化の具体を示すことができた。

○　地歴公民科全教員による地理・歴史の授業開発を複数実践してきたことで，教員の科目に対する理解が一層深まった。さらに授業の開発・実践・振り返りを通して，地理・歴史それぞれの「見方・考え方」について教員相互の理解を深めることができた。また，生徒の感想では，地理と歴史の相互のつながりを理解できた回答が大半を占め，社会的事象を時間軸と空間軸の双方で捉え，多面的・多角的な考察を促す効果を確認できた。

○　「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面と規準の設定については，数ヶ月かけて取り組んだ。単元の学習開始時の「見通し」と途中の「学習活動」，まとめ時に自身のはじめの記述と比較し変容を確認する「振り返り」の三つの評価場面を設定すること及び評価方法について，教員間で共通認識をもつことができた。

○　「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価については，相互の関係を踏まえて適切な頻度で行った。「学習改善につなげる評価」を単元の核となる活動で設定し，つまずきの見られる生徒を支援し，「評定に用いる評価」をまとめの場面で設定した。こうした評価場面の精選により，過度な負担を避けて適切に観点別評価を行うことができた。

○　「歴史総合」大項目Ａ「歴史の扉」を見据えた実践（単元「歴史の扉を開けよう」）では，博物館や美術館，図書館，文書館等が所蔵しているデジタルアーカイブに加えて，地理情報システムも活用し，空間や時間のつながりを踏まえて課題研究に取り組むことができた。

○　一人一台端末で授業支援アプリを活用し，他クラスの生徒とも意見交換することができ，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたＩＣＴ活用の在り方を示すことができた。

○　３年生の資料・データの読み取りでは，昨年度末に歴史選択者において肯定的意見が減少したが，今年度は増加した。資料を活用する学びに継続して取り組んだ成果と考えられる。

●　２年生の日本史選択者では，昨年度と同様に資料・データの読み取りについて否定的意見が増加した。要因としては古文書等の不慣れな資料に対する苦手意識が挙げられる。いかに苦手意識を持たせずに資料読解を進めていくかが課題である。

●　２年生の地理選択者では，現代社会の諸課題との結びつきについて肯定的意見が増加したが，歴史選択者では減少した。過去を中心に扱う歴史と現代社会につながる教材を多用する地理の差が表れたと考えられる。実社会とのつながりが感じられる歴史資料を提示する，または生徒に見つけさせるために，今後一層の工夫が必要である。

４　今後の取組

・「地理総合」「歴史総合」ともに２単位の限られた授業数であることや本校では１年生で履修することを踏まえ，生徒の状況に合わせて活動を精選しながら各単元と授業を構想する。

・研究指定校事業での経験を踏まえ，生徒が地理や歴史の学習内容を自分事として捉え，現代の諸課題について時間軸と空間軸から考察できる力を養う。

・中学校と連携し，中学校段階での学習内容や取組を把握することで学びの円滑な接続を図る。